

中心聖句：伝道者の書 12:13-14 「12:13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。12:14 神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」

皆さんおはようございます。皆さんにまたお会いできて嬉しいです。今朝は、最近ではクリスチャンの間であまり話されない話題についてお話したいと思います。今日の説教のタイトルは「神への恐れ」です。なんだか恐ろしそうな題名ですね、そうだと思います。けれどもこれは御言葉全体で見られることですから、私たちが注意を払って深刻にとらえる必要があることです。

この話題について最近私がずっと考えていたのは、今年、妻とのある会話があったからです。皆さんの中には妻をご存知で、彼女が時に非常に率直な意見を言うのをご存知の方も多はずです。その彼女が私に衝撃的なことを言いました。私を見るなり「ブラッド、あなた神を恐れてないわね」と言ったのです。大変ショックな一言でした。「ブラッド、あなた神を恐れてないわね」です。妻は大変明敏な女性です。何かを否定したり言い逃れしたりするための発言はしません。ですから私は、なぜ彼女がそう言ったのか熟考し、自分を振り返るようになりました。私は大人になってからずっと神と御言葉を深刻にとらえてきました。イエスに従うべく追求し、イエスとその教会にお仕えしてきました。イエスの教会で主の民にお仕えするのも楽しんでいました。う～ん、もしかしたらそれが問題の一部でしょうか。「私が」「私が楽しむ」ということに、キリストの教会で「私が」「楽しむ」「仕える」ことに焦点が当たっていたのかもしれませんが。私を造られ、賜物を与え、私を救われた主なる神に、私の思いは注がれていなかったのかもしれませんが。私は神を愛することを忘れてしまったのでしょうか？神を恐れることを忘れてしまったのでしょうか？霊的生活で独りよがりになり、自分の満足を求めるようになったのでしょうか？

若い頃、自分にとって大変特別で、生活の中で頻用して行こうと決意した聖句が沢山ありました。ピリピ 2:3-4、へブル 10:24-25、ヤコブ 1:27、コリント第一 10:13 です。そしてもう一つ旧約聖書の中に特別な聖句があります。パワーポイントの画面に伝道者の書 12:13-14 が映し出されていますね。旧約聖書の中でも伝道者の書は私のお気に入りです。クリスチャンで伝道者の書が好きと言う人は多くないかもしれませんが、とにかく私にとっては旧約聖書の中でもお気に入りです。私の中に悲観的な傾向があって、この書は多くの点でそれを指摘してくれます。この世での人生は時にむなしなもの。知恵、快楽、富への欲求など、人生で追及するどんなものも究極的には私たちの深い部分を満たすことはできません。皆さんも伝道者の書の冒頭の部分は何度も聞いたことがあるでしょう。「空の空。すべては空。」すべてはむなく、無益です。

けれども、神は私たちが造られました...価値と目的を持って。伝道者の書は色んな角度から人生のむなしさを訴えた後、最後の2章で、私たちの創造主をしっかりと心に留めて生きるべきだと熱心に勧めています。そしてこの書の最後の2節で最高潮に達します。この2節は私にとって大切に、何度も心を注ぎ、これによって生きようと心がけてきた聖句です。

伝道者の書 12:13-14 「12:13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。12:14 神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」

この書がすべて語った末の結論は、私たちは、創造主に心を留めて生きなければならないということです。神を恐れなければなりません。そして神の命令を守るのです。神を恐れ...そして神の命令に従うのです。これは、地上のすべての人に適用されます。なぜそうすべきなのでしょう？14節には「神は....すべてのわざをさばかれるからだ。」とあります。最後には、私たちそれぞれ

が行うすべてのことが創造主によって裁かれるのです。「神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」最後の審判についてはマタイ 25 章、コリント第一 3:11-15、ヨハネの黙示録 20:11-15 などに書かれています。ヨハネの黙示録 20 は、白い御座の裁きが起こり、書物が開かれ、その書物に書き記されていることに従って、すべての死んだ人々が裁かれる、つまりこの地上の人生での行いに応じて裁かれる場面が見て取れます。

「神を恐れる」とはどういう意味でしょう？これには2つの基本的な性質があります。

「神への恐れ」の1つ目の性質は、聖い神の御前において「恐れ慎む」ことで表される神への恐れです。「恐れ慎む」とは、モーセが燃える柴の前に立った時や、聖なるシナイ山で時を過ごした時に持った感覚です。燃える柴の前に立つ場面が出エジプト記 3:5-6 にあります。

「3:5 神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」3:6 また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。」

これが聖い神のご臨在の中で、恐れ慎むということです。

「神を恐れる」の2つ目の性質は、怖がり、恐怖を抱くことです。私が10代、20代の頃恐怖を感じた聖句をお分かちしましょう。

マタイ 10:28 「10:28 からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」

イエスに従う者として迫害を受けた結果、誰かがあなたを殺すことができるかもしれません。そのような人たちを恐れてはいけません。代わりに、あなたをお造りになり、ゲヘナで私たちを滅ぼす力をお持ちである神を恐れるべきなのです。この聖句は、若い青年だった私が、神を離れて罪の生活に向かうことから遠ざけてくれました。

神への恐れについてのこの2つの性質を合わせると、神への恐れとは、常に、人生で追い求める全てのことにおいて神に心を留めるということです。神を心に留める...あなたの内にある神の聖いご臨在を覚えること....最後には裁きに直面することを覚えること...このような考えを心に置いた状態で人生の決断をしていかなければなりません。基本的に神を恐れることが意味するのは：神は最後には私たちを裁かれる、と心の内で神を覚えることであり、それはキリスト者である私たちへの神の御心に見合った行動で表れてくるものである。神の命令への従順として、もしくは神に不従順で居続けていれば恐怖として表される。

私は、神を恐れ、見えるものも隠れたものもすべての行いが、最後には裁かれるということを知った上で神の命令に従うべく、伝道者の書 12:13-14 に基づいて生きようとしてきました。ですがそこで妻が私の人生の驚くべき評価を下したのです。「ブラッド、あなた神を恐れてないわね。」彼女の言葉で私は考えさせられました。私は神を忘れてしまったのだろうか？日常の歩みにおいて神を忘れてしまっているのだろうか？神の命令に従うことにおいて妥協してしまっているだろうか？神が最後には私の行いのすべてを裁かれるということを知ってしまっているのだろうか？このような質問は聞くにも恐ろしいものですが、全ての疑問への答えはイエスのようです。ローマ 12:1-2 が教えるように、私はもっと神を心に留めるべきで、もっとイエスの似姿に見合うようにならなくてはならないのです。神と御子に心からの思いをおささげることがを忘れた、淡々とした祈り生活を送るべきではないのです。

このようなことをじっくりと考えていた時に、ずっと持っていたけれども読んだことのなかった一冊の本を本棚から引っ張り出しました。「敬虔の実践（仮題）」というタイトルの本です。

「敬虔」です。この本の最初の方で、私も知っている説教者の大変有益な説教シリーズについて言及されていました。説教者はバプテストの牧師、アルバート・マーティン師で、彼は非常に雄

弁かつ情熱的で、徹底的に聖書に基づいた説教者でした。私が数か月前に選んだ敬虔についての本も、「神への恐れ」というタイトルのマーティン牧師の説教シリーズを聞くよう勧めていました。この説教は1970年のものですが、インターネットで探せば見つかるのではと思いました。そして実際に見つけました。スクリーンと今日のメッセージの用紙にもページリンクを張り付けています。https://www.sg-audiotreasures.org/am_fear.htm (言語は英語のみ)

御言葉が盛りだくさんでパンチの聞いた説教シリーズです。私はこの説教を聞いて、ただ自分の日常生活で神を恐れることへの思いを再整理して行こうとしただけでなく、いつか皆さんにこれをお分かちしようと決めました。ということで、ここからの今日のメッセージは、このマーティン牧師の説教シリーズから私が学んだことの抜粋をお分かちします。

少し前に、聖なる山、シナイ山について触れました。そこで何があったでしょう？そこでモーセが十戒を受け取りました。場面全体を覚えておられますか？イスラエルの民との契約が立てられ、彼らにおきてが与えられた際に、山で神のご臨在が実際に目で見え、耳で聞かれたその場面を、出エジプト記19章と20章からいくつか読んでみましょう。まずは出エジプト記19:5-11、十戒が与えられる前の場面で神が語られます。

「19:5 今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。19:6 あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」19:7 モーセは行って、民の長老たちを呼び寄せ、【主】が命じられたこれらのことばをみな、彼らの前に述べた。19:8 すると民はみな口をそろえて答えた。「私たちは【主】が仰せられたことを、みな行います。」それでモーセは民のことばを【主】に持って帰った。19:9 すると、【主】はモーセに仰せられた。「見よ。わたしは濃い雲の中で、あなたに臨む。わたしがあなたと語るのを民が聞き、いつまでもあなたを信じるためである。」それからモーセは民のことばを【主】に告げた。19:10 【主】はモーセに仰せられた。「あなたは民のところに行き、きょうとあす、彼らを聖別し、自分たちの着物を洗わせよ。19:11 彼らは三日目のために用意をせよ。三日目には、【主】が民全体の目の前で、シナイ山に降りて来られるからである。」

神はイスラエルの子孫と契約を立てることを切望され、モーセを通して、民の長老たちは契約を守ることを約束します。すると神は民に、自らを聖別するよう命じられます。聖別とは、誰かもしくは何かをきよめるために一般的なものから離すこと、神の目的のために区別されるということです。3日間、民は山で神にお会いするために洗いきよめられました。

出エジプト記19:16-20「19:16 三日目の朝になると、山の上に雷といなずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。19:17 モーセは民を、神を迎えるために、宿営から連れ出した。彼らは山のふもとに立った。19:18 シナイ山は全山が煙っていた。それは【主】が火の中であって、山の上に降りて来られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山が激しく震えた19:19 角笛の音が、いよいよ高くなった。モーセは語り、神は声を出して、彼に答えられた。19:20 【主】がシナイ山の頂に降りて来られ、【主】がモーセを山の頂に呼び寄せられたので、モーセは登って行った。」

山を雷といなずま、密雲が覆いました。民は宿営の外に出て、神を迎えるべく山のふもとに立ちました。

出エジプト記20章で神は、民に十戒を与えます。

出エジプト記 20:1-3 節「20:1 それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。20:2 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、【主】である。20:3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。…」
十戒の残りは皆さんもご存知ですね。全てはここでは読みません。

出エジプト記 20:18-21 「20:18 民はみな、雷と、いなずま、角笛の音と、煙る山を目撃した。民は見て、たじろぎ、遠く離れて立った。20:19 彼らはモーセに言った。「どうか、私たちに話してください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお話しにならないように。私たちが死ぬといけませんから。」20:20 それでモーセは民に言った。「恐れてはいけません。神が来られたのはあなたがたを試みるためなのです。また、あなたがたに神への恐れが生じて、あなたがたが罪を犯さないためです。」20:21 そこで、民は遠く離れて立ち、モーセは神のおられる暗やみに近づいて行った。」

神の聖いご臨在が雷といなずま、角笛の音と、煙りで現われています。民はたじろぎました。彼らには荷が重すぎるように思えたのです。けれども 20 節でモーセはこう言います「恐れてはいけません。神が来られたのはあなたがたを試みるためなのです。また、あなたがたに神への恐れが生じて、あなたがたが罪を犯さないためです。」

なによりもまず:恐れてはいけません。神はこの全てにおいて目的を持っておられます。それはあなたがたを試みることです。あなたを試みる..神は民が本当に神に対して忠実で、本当に神に従うのかを知りたいのです。出エジプト記 19 章に見られるように、神との契約関係の内に生きること同意した民の内に、神の恐れが留まることを神は望まれます。神への恐れは、神の契約の民の内に存在しているべきです。罪を犯さないという目標を持って。神への恐れは、罪に陥らぬよう、神の民の内に留まっているべきものなのです。

この聖句にある表現が、ペテロ第一 2:9-10 に繰り返されています。ここで使徒パウロは、イエス・キリストを救い主として信仰を置いた新しい契約の人々にあてて書いており、出エジプト記、申命記、イザヤ書からの引用があります。

ペテロ第一 2:9-10 「2:9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。2:10 あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。」

出エジプト記 19 章とペテロ第一の両方で、神の民は「聖なる国民」と呼ばれ、また「祭司の王国」もしくは「王である祭司」とも呼ばれています。

ここで祭司と言われているのは、民がただ聖いことを指すだけではなく、世俗的なものとは分けられ、神にささげられているということです。また、ここでの「祭司の王国」は契約の民は神と異邦人の間の仲裁人となるべき者ということです。祭司は、聖い神と民衆の間を取り持つ存在です。ですから旧約の契約にあずかる集合体・イスラエルと、新約の教会は、神と不信仰・不従順な民との間の仲裁者となるのです。私たちは彼らに神のメッセージをもたらし、悔い改めに召し、創造主と正しい関係へと導くのです。

自分自身が神と近しく歩むことを忘れてしまっていたとしたらそれは不可能です。マタイ 5:13 で、イエスは弟子たちに言いました。

「5:13 あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。」

塩が塩けをなくしたら、もう益はありません。神の民が神を深刻にとらえることを忘れ、完全に神に従おうとしなければ、この世においての影響を失います。

ですから、神を深刻にとらえる、つまり神を恐れるよう注意していなければなりません。シナイ山で、民は聖く威厳ある神の出現を実際に目にしました。それは抱えきれないようなことで、そこがポイントです。民は実際に重荷を感じ、モーセに訴えました。けれどもモーセは恐れるなど命じました。恐怖心によって身動きが取れなくなってほしくなかったのです。と言っても、モーセは、彼らの心の中に神への恐れを保つようにと教えました。そうすれば罪から離れていることができるからです。モーセがこれを**試み**と言ったことは興味深いことです。神は神の民が神に忠実であり続けるかを見るべく試みられます。残念ながら旧約聖書を読むと、人々が何度も何度も失敗するのが見て取れます。

神への恐れを忘れてはいけません。先ほど言ったように、恐れには2つの性質があります。一つは「恐れ慎む」ことです。神のご臨在が山で雲と雷によって現わされた時に神が求められた効果です。神への恐れのもう一つの性質は、怖がり、恐怖を抱くことです。これは1つ目の性質よりは登場頻度は少なくとも、聖書の最初から最後まで見られるものです。

創世記 3:9-10 「3:9 神である【主】は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」 3:10 彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」」

詩編 119:120 「119:120 私の肉は、あなたへの恐れで、震えています。私はあなたのさばきを恐れています。」

新約聖書に見られる興味深くもひどい出来事が、神を深刻にとらえるということと、神とクリスチャンに対して誠実であることの重要性を示しています。使徒言行録 5章のアナニヤと妻のサツピラの話です。4章の終わりで彼らは、バルナバと他のクリスチャンが自分の持ち物を売って、そのお金のすべてを使徒に渡し、クリスチャンコミュニティの中でも貧しい者たちに分配しているのに気づきました。

使徒 4:34-35 「4:34 彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、4:35 使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与えられたからである。」

彼らは自分の地所をみずから売りました。要求されたわけではありません。クリスチャンたちが困難にある兄弟姉妹をいかに気にかけていたかが分かります。

しかしこの状況を見たアナニヤとサツピラは、同様のことをすれば仲間の目に入り、彼らの慈善行動に感動するだろうと思いました。そしていくつか自らの地所を売ったのですが、お金を手元に一部取っておきました。彼らの施しの目的は誇示で、心からの愛の施しではなかったのです。

使徒 5:1-6 「5:1 ところが、アナニヤという人は、妻のサツピラとともにその持ち物を売り、5:2 妻も承知のうえで、その代金の一部を残しておき、ある部分を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。5:3 そこで、ペテロがこう言った。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。5:4 それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」 5:5 アナニヤはこのことばを聞くと、倒れて息が絶えた。そして、これを聞いたすべての人に、非常な恐れが生じた。5:6 青年たちは立って、彼を包み、運び出して葬った。」

この、自分の栄光を求め、施しと偽って貧しい者から盗むような偽善の行いは、アナニヤと妻の命を代償としました。ここでの「恐れ」という言葉に気づきましたか？5節「...そして、これを聞いたすべての人に、非常な恐れが生じた。」恐怖を感じる恐れです。

続きを読んでみましょう。

使徒 5:7-11 「5:7 三時間ほどたって、彼の妻はこの出来事を知らずに入って来た。5:8 ペテロは彼女にこう言った。「あなたがたは地所をこの値段で売ったのですか。私に言いなさい。」彼女は「はい。その値段です」と言った。5:9 そこで、ペテロは彼女に言った「どうしてあなたがたは心を合わせて、主の御霊を試みたのですか。見なさい、あなたの夫を葬った者たちが、戸口に来ていて、あなたをも運び出します。」5:10 すると彼女は、たちまちペテロの足もとに倒れ、息が絶えた。入って来た青年たちは、彼女が死んだのを見て、運び出し、夫のそばに葬った。5:11 そして、教会全体と、このことを聞いたすべての人たちとに、非常な恐れが生じた。」

11節にはこうあります「5:11 そして、教会全体と、このことを聞いたすべての人たちとに、非常な恐れが生じた。」教会全体です。教会全体を、そして恐らくもっと広い範囲で、未信者の人たちをも含む多くの人が神への恐れに包まれたことでしょう。ここで学べること：神を重くとらえましょう。非常に深刻に。

ヘブル 10:31 「10:31 生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。」

何年も前に、私たちの念願とすることが何であるべきかについての説教を聞きました。説教者は「念願」という言葉が出てくる聖句に注目していました。その中の1つはコリント第二 5:9です。素晴らしい箇所ですが、その後の2つの節が私の今日の話題に直結していると気付きました。

コリント第二 5:9 「5:9 そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」

次の10-11節を見てみると、なぜそれを私たちの念願とするべきか教えています。

コリント第二 5:10-11 「5:10 なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。5:11 こういうわけで、私たちは、主を恐れることを知っているので、人々を説得しようとするのです。私たちのことは、神の御前に明らかです。しかし、あなたがたの良心にも明らかになることが、私の望みです。」

今日お話ししたことのまとめともなるこの2つの節を持って終わろうと思います。この地上の人生における私たちの行いの1つ1つが裁かれます。私たちは神を喜ばせるべきです。神を恐れるべきです。11節には「主を恐れることを知っているので、人々を説得しようとするのです。」とあります。私たちは主イエス・キリストの福音を受け入れるよう、人々を説得するのです。

「王なる祭司」になることについてお話ししたことを覚えておられますか？クリスチャンがそれです。神と失われた世の間の仲裁者なのです。神への恐れは従順な人生を生きるためだけではなく、キリストの福音によって失われた世に触れ、彼らを悔い改めに召し、彼らの創造主とのあるべき関係に導くことのきっかけとなるべきです。

今日のメッセージの主要テーマで締めくくりましょう。

崇敬と尊敬、ほまれをもって神を恐れよ。

恐怖を持って神を恐れよ、神はあなたの行いのすべてを遅かれ早かれ裁かれる。

神の命令に従え

神を重くとらえ、神との契約の関係を深刻にとらえよ。

神と失われた世を仲裁する者、王なる祭司となれ。

日常生活で神の臨在の内を生きるよう心に留めよ。